

山極壽一さん

[京都大学総長]



大変お忙しい中、インタビューにお答えくださった山極壽一先生。京都大学総長であり、ゴリラ研究の第一人者としても有名です。探検好きで本が好きだった子ども時代から、今抱えている問題意識、読解力の重要性など、多岐にわたりお話いただきました。

未知の世界を探究するのが 大好きだった子ども時代

育ったのは、東京の郊外の国立市です。当時はまだ空き地など自然の遊び場も多く、子どもの頃は外に出かけて、ほとんど家にいませんでした。

一番好きだったのは探検ごっこです。笹藪を切り拓いて秘密基地を作ったり、神社に忍び込んだり。未知の世界を探究するのに夢中でした。

そんな子どもの頃の記憶がよみがえったのは、京都大でサル学・霊長類学を学び、再び自然とつきあい始めたときです。観察のため彼らと一緒に自然の中に入っていったとき、「これは、俺が昔、夢描いていた探検の世界かもしれない」という気になりました。

もうひとつ、夢中になったのは「本」です。図書館や貸本屋に通っては、熱心に本を読んでいた。

また、当時の僕は日記少年で、とにかく字を書くことが好きでした。このとき自分の体験を文字にしていた経験が、現在の著述活動につながっているかもしれません。

自然の中に入って行って 肌で理解してほしいことがある

時々自然の中を一人で歩き、風の音や虫の声、動物の足音など、様々な音を聞いて、自然と対話をします。

今の地球は、人間に都合のいいように作りかえられています。例えば、地球上の哺乳動物の9割以上は、人間と家畜で占められています。人間は73億

人、牛は15億頭、豚や山羊、羊は10億頭以上、鶏に至っては500億羽以上いると言われています。一方、野生動物のゾウは50万頭、ゴリラは20万頭。生存している桁から違い過ぎます。

そういう世界に生きていて、果たして人は、人間らしい楽しみ方ができているのか。生物としての人間をもう一度考え直さなければいけません。

日本の国土の7割は森林地帯です。自然や文化といったものは、頭ではなく、肌で理解するもの。子どもたちの感性がつぶれないうちに、そのような場所になるべく連れて行って、自然の息吹を体験してほしいですね。そうした上で本を読めば、もっと色んな世界が見えてくるでしょう。

自分を形づくるための手助けが できるのが先生

人間の子どものゴリラの子どもも、自分を最大限に愛してくれる存在に見守られて育つのは同じです。ですが、「他人になれること」は人間の子どものみにはできません。

『ロビンソン・クルーソー』や『十五年漂流記』を読んで、あるいはイチロー選手のようなスターにあこがれて、「将来、あんな風になりたい」と自分の目標をもつことは、ゴリラやチンパンジーにはできないことです。自分というものが何かに憑依して違う者になる、その夢をつむぐのが小学生時代であり、大人はそれをうまく誘導していく役割があります。

また、学校での姿、家庭での姿、友

だちの中での姿と、場面によって「変身」できるのも人間だけです。子どもは、他人からの視線によって変容していくことを体験します。それは文化を覚えるということです。

人間は、他人の視線によって自分を意識し、自分を肯定していきます。その手助けができるかどうかは、学校の先生にかかっていると言えるでしょう。

学びを続けるのに大事なのは 読解力を育てること

スポーツの競技能力が20～30代でピークを迎えるのと違い、知能の世界は限界がありません。

学問の世界は、どんな年齢になっても新しいことに触れられるし、自分をその中で開くことができます。何度でもスタートできるマラソンみたいなものです。

ただし、重要なのは読解力です。文字を読み、言葉を聞いて、その世界を自分のものにする能力は、小中学校までの間に鍛えなければいけません。

そのためには対話をする必要があります。対話しながら、相手が話をしていく世界を頭に描ける能力をつくること。文字を読んで、その文字のつくりだす世界を理解すること。これは基本中の基本と言えます。

言葉を知識として身につけるのではなく、言葉を体にしみこませる必要がある。そのためにぜひ、子どもたちとしゃべりまくってください。

対話で人は育つのです。

PROFILE

やまぎわ じゅいち ● 1952年東京都出身。霊長類学・人類学者、京都大学総長。京都大学理学部卒、京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学、理学博士。ゴリラ研究の世界的権威。ゴリラを主たる研究対象にして人類の起源をさぐる。2017年から日本学術会議会長。「サル化」する人間社会「京大式 おもしろ勉強法」など著書多数。

言葉を身体化させて 対話することで人は育ちます